

イエスにならう生き方を求めて

悩みを持つ人々の痛みに寄り添い、その悩みを少しでも分かち合うことのできる教会共同体をめざして

日本カトリック司教団著「いのちへのまなざし」増補新版より



みんな 集まれ、平和を求めろひと！

〜今こそ大切な平和憲法〜

2月25日(土) サクラファミリア(大阪梅田教会) 3階聖堂に於いて、松浦悟郎司教(カトリック名古屋教区)を講師にお招きして、標記の講演会・学習会を実施しました。



すべての人の平和を願い 戦争をしない 軍隊を持たない この憲法9条を世界の宝に

ピース9の会 デザイン 松本ルカ

「平和憲法」を持つ日本が、いつの間にか「有事」のためという口実で「9条さえなくせば」と、戦争ができる国になりつつあると危機感をもちます。

今や「世界の平和のための貴重な宝」である「憲法9条」を守りたいと、120余人が集まってくさいました。カトリック関係者だけでなく、プロテスタント教会の方、市民団体の方が多く参加されたことに大きな喜びを感じ、力をいただきました。

「戦争を始めると終わりが見えない」ことは、ウクライナの惨状を見てもわかります。「絶対に戦争を起してはいけない」と考え

- I部 (映像)
 - * 「武器なき戦い アフガンを歩く日本国憲法」 中村哲医師
 - * 朗読動画 「井上ひさしの子どもに伝える日本国憲法」
- II部 (講演)
 - 松浦 悟郎司教 (意見交換) 「ロー司教と平和を語ろう！」

恒久平和を願って戦争をしない、軍隊を持たないことを謳ったのか、「米軍と一緒に日本も戦争ができる国にしたい」のかを考えて、子どもや孫の世代にも真剣に伝える責任を感じました。

憲法9条の大切さを身近な人に伝え、賛同者を増やし、いつか憲法改正の国民投票が実施される時には、「改正」反対！の意思表示をしましょうと約束して解散しました。

(ピース9の会 大阪の集い実行委員会・ピース9の会 堺グループ)

映画 『東京クルド』 上映会を終えて

3月4日(土)、カトリック夙川教会のブスケホールに於いて、『東京クルド』上映会を開催しました。参加者は95名。



夢みてしまった。絶望の国で

出典：ドキュメンタリー映画『東京クルド』公式サイトより

ラマザンとオザンは、小学生の頃、故郷での迫害を恐れ家族と「平和な日本」に助けを求めたトルコ国籍のクルド人。しかし、住民票も健康保険もなく、働くことは禁じられ、いつ入管に収容されるかわからない非人道的な毎日を送る。専門学校を何度受験しても「仮放免」を理由に入学を拒否されるラマザン。将来が見えない毎日に、オザンは「自分は虫より価値がない」と口にする。そんな時、この映画の日向監督と出会い、「仮放免者の窮状を訴えたい」と、入管に捕まる覚悟でこの映画に出演した。

「平和」とは戦争がない状態だけではない。教育や労働の機会、夢や希望を奪われた状況は「平和」ではない。彼らの希望を奪っているのは、誰か？この映画を観た私たちの行動が問われている。

上映終了後、「在留特別許可」を求める若者2人の思いを聴いた。シナピスのビスカルドさんの「彼らに『頑張ります！』と言わせる国ではない。彼らは十分すぎる程頑張っている。頑張らないといけないのは私たちなのです」という言葉が心に響いた。

*トルコ政府からの支援が届かない「クルド人居住」地への救援募金37,000円は「日本クルド文化協会」に送金させていただきます。また、二人のペルー国籍の大学生「Mさん、Sさん」への応援募金も彼らの学費支援として大切にに使わせていただきます。ご来場の皆さまの温かいご協力に感謝いたします。

(在留特別許可を求める子どもと歩む会 ぬくもり)

第10回「いのちの光 3.15 フクシマ」主催

「フクシマが背負ってきたもの 伝えつづけるもの」に参加

現在の請戸漁港

3月15日(水)から18日(土)にかけて仙台教区の原町、そして元寺小路教会で開催されるミサと講演会に出席するため、福島県南相馬市と宮城県仙台市を訪ねた。2012年に発足した会で、毎年福島第一原発の爆発事故が起きた3月15日に「いのち」に向きあい、ともに祈り現状を知ろうと、実行委員会を立ち上げ活動されている。

講演会では震災前まで浪江町の請戸漁港で漁師をされていた志賀勝明さんにお話を伺った。

「地震、原発事故当時避難を体験し今になってようやく受け止めて冷静に考えるようになってきた」と話しはじめられた志賀さんは、高校を卒業してから震災まで漁師として生計を立ててこられた。しかし、津波で船は壊された上、原発事故によってやむを得ず漁師を断念。避難先で農業をはじめられた。「海と山を経験し身をもって知ったことは、山と海はつながっているということなんだよ。19年の台風の影響で、除染されていない

山に大量の雨が降り注ぎ、削り取られた土砂が川から海へと流れ込んだ。泥は重く沈む。河口付近の放射線量が心配だ。しかし請戸の河口付近の調査は未だ行われていない。なんとか調査してほしいんだよ。俺は専門家でもなんでもねえ。だからわかんねえんだよ。本当のことが知りてえんだ」語気を強め何度も言われた。一方、燃料デブリと呼ばれる放射能を帯びた物質を取り出す処理のために冷却している「汚染水」を、政府と東電は海へ放出する準備を進めている。国境はあっても海は世界と繋がっている。志賀さんは「孫たちの将来はどうなるんだ」と、脅かされているいのちを思い憂えておられた。

翌日、浪江町請戸、双葉町周辺を志賀さんが車で案内してくださった。福島第一原発から10キロ圏内。震災まで請戸漁港は大小100隻ほどの漁船で賑わっていた。今はわずか28隻ほどが試験操業しているそうだ。真新しい倉庫が立ち並び

綺麗に舗装されたアスファルトの上で静かに車を止めて「ここは船溜まりだった。俺の船はここにいつも止めていた」と思い詰めた表情で言われた。そこは埋め立てられ当時の様子は跡形もない。そして小さくつぶやくようにこう言われた。「もう、戻れねえよ」

(シナピス 原慶子)



「ここにいつも止めていた」